

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02336

研究課題名(和文)幕末世相取材錦絵の美術史的研究

研究課題名(英文)The Study of Nishiki-e Calicatures in the Bakumatsu Period from the Viewpoint of Art History

研究代表者

大久保 純一 (Okubo, Junichi)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授

研究者番号：90176842

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：江戸時代末期に出版された錦絵の風刺画を、風刺の読み解きのコードや主題をもとに、以下のカテゴリーに分類した。

1) 武者絵など過去の歴史的出来事に偽装したもの。2) 異類合戦に事寄せたもの。3) 市井風俗画を装ったもの。4) 子供あそびに仮託したもの。5) 鳥観図に戊辰戦争の戦場を重ねたもの。6) 百鬼夜行図などの妖怪画に仮託したもの。

この分類をもとに、風刺画作成にも従来の武者絵において幕府の統制を回避する手法が応用されていることを明らかにした。また、従来風刺画と認識されていなかった錦絵をあらたに風刺画として抽出しうる可能性を見出した。成果の一部は、国立歴史民俗博物館の特集展示の展示内容に反映させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、江戸時代末期に出版された錦絵の風刺画は美術史的な価値の低いものとして研究対象にはなっていなかったが、膨大な画像を集積して分析することで、武者絵や百鬼夜行図などの妖怪画など、絵画史の分野でも注目されているジャンルにおける作画手法がたくみに応用されていることを明らかにすることができた。このことにより、従来美術史研究においては看過されてきた幕末風刺画が同時代のほかの絵画と密接な関係を持ち、研究対象として高い価値を有することを示した。

研究成果の概要(英文)：Nishiki-e caricatures published at the end of the Edo period can be classified into the following categories based on the interpretation codes and themes of those caricatures. 1) Items disguised as historical events such as warrior paintings. 2) Those who have been involved in a different kind of battle. 3) Items disguised as genre paintings. 4) Items disguised as children's play. 5) A bird's-eye view overlaid with the battlefield of Boshin War. 6) Temporary entrusted to yokai paintings such as Hyakki Yagyo. Based on this classification, it was clarified that the technique of radical warrior prints circumventing the control of the shogunate was applied to these caricatures. I also found the possibility that some Nishiki-e, which were not previously recognized as caricatures, could be newly recognized as caricatures from these viewpoints. Some of the achievements were reflected in the exhibition contents of the National Museum of Japanese History.

研究分野：美術史

キーワード：錦絵 風刺画 武者絵 百鬼夜行図

## 1. 研究開始当初の背景

幕末風刺画の研究に関しては、美術史の分野ではほぼ等閑視されてきていた。たとえば、幕末風刺画のブーム成立のきっかけとなった記念碑的作例として注目されている天保14年(1843)の歌川国芳の「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」は、国芳の作品集を編纂する際に収録さえされていないケースも見出される。

風刺画研究は美術史よりも政治史や社会史の研究者が先行し、大きな実績を上げてきている。

『藤岡屋日記』など同時代の文献資料との照合により天保改革以後の風刺画の主要作品と出版動向を分析した南和男の業績(『幕末江戸の文化 浮世絵と風刺画』1998年)はその代表的なもので、また戊辰戦争を諷した大量の作品を、戦局の推移にもとづき時系列で解析した奈倉哲三『絵解 幕末諷刺画と天皇』(2007年)などの成果も注目される。本研究を進めるにあたり、こうした歴史学方面での成果を踏まえずには先に進むことはできない。

しかしながら、風刺画といえども同時代の浮世絵の中で独立して生成したものではなく、武者絵や戯画の伝統にもとづき、その図像の引用や伝統的テーマへの新たな意味付与などを通して形成されている。美術史の立場からはこれまで幕末風刺画の研究は低調であったが、こうした絵画史の研究成果を踏まえた上での新たな風刺画研究が求められるべきであると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は浮世絵の風刺画に絵画史的観点から分析を加えるものである。天保の改革を機に成立した風刺画は幕末動乱の世情を背景に流行を見せ、当時の出版統制令の下、新興の版元らにとつては高い売れ行きを見込めるハイリスク・ハイリターンの商品となっていた。

本研究では従来、幕末政治史あるいは社会史の研究対象とされてきながら、美術史の方面ではほとんど看過されてきた風刺画を、先行する浮世絵作品のみならず、古絵巻や版本挿絵の図像伝統をいかに踏まえつつ、いかにして伝統図像の上にあらたな意味を付与したのか、あるいは同時代の武者絵や戯画との密接な関わりなども視野に入れつつ、絵画史上の位置づけを深めようとするものである。

## 3. 研究の方法

幕末の風刺画に関しては、東京大学史料編纂所のデータベースなどに相当点数の作例が収録・公開されているが、当時出版された膨大な風刺画全体の中では、まだ一部にしか過ぎないと考えられる。本研究では国内外の所蔵機関のコレクションや出版物からできるだけ多くの作例を拾い挙げてデータベース化し、それを政治風刺、経済情勢や世相風刺などの主題で分類することで、幕末風刺画の全体像に明らかにし、研究の基礎形成をはかる。

風刺画の多くは、特定の政治的出来事を描く上で、当局の摘発を逃れるために表面上類似した過去の歴史的出来事に仮託して描く傾向がある。作成したデータベースをもとに、個々の風刺画が過去のどついった歴史事象と結びついて絵画化され傾向があるかを詳細に分析する。

たんに仮託された過去の歴史事象を明らかにするだけでなく、とくに図像の源泉となった先行作品を明らかにする。たとえば、調査対象となる先行作としては、幕末以前の武者絵や武者絵本、あるいは読本挿絵などが想定されるが、江戸後期に大量に制作された鳥獣人物戯画や百鬼夜行絵巻といった古絵巻の模本類も期待できる取材源である。このことにより、先行図像の意味的な変換のあり方(擬装のための主題傾向やコードの抽出)について明らかにしたい。

## 4. 研究成果

江戸時代末期に出版された膨大な点数の錦絵の風刺画を調査し、画中人物の紋所や所持する事物、風俗といった風刺の読み解きのコードや、歴史的出来事を描いた武者絵や物語絵などといった主題をもとに、以下の6つのカテゴリーに分類することができた。

1) 武者絵など過去の歴史的出来事に偽装したもの。たとえば、戊辰戦争の一戦局である信州飯山城下での戦争を表現するにあたり、戦国時代の出来事である武田信玄方の軍勢が村上義清方の武将小田井又三郎の居城を攻撃している場面でカモフラージュした月岡芳年作「信州小田井城合戦之図」などが例に挙げられる。この作品では、戦闘する双方の軍勢は戦国時代の戦いと題名では謳っておりながら、ヘルメットなどの洋式軍装が描かれるなど、解読の手掛かりが潜まされている。

もともと武者絵は幕府当局から禁止されていた天正年間以後の出来事を描くため、画中人物の紋所などを読み解きの符号として用いることが多かったが、この手法は幕末の同時代の事件を武者絵に事寄せて描くものにも、より巧妙なかたちで応用されている。たとえば、蛤御門の変を風刺した歌川芳盛画「昔ばなし舌切雀」では、劣勢の長州藩勢を葛籠から湧き出す化物の群れで表現しているが、その中心にいる三つ目の大入道妖怪の顔は毛利家の家紋である一文字に三星で表されている。

戦局が複雑化し、また長期化した戊辰戦争では、『絵本太閤記』などに取材した戦国や安土桃山時代の戦いに仮構した図が多数見出されたが、それらの中には従来は武者絵でなじみのない戦いが取り上げられることが散見される。それらは、たんなる武者絵としての市場価値はかならずしも高くはなく、ほかの出版目的が背後にあると考えられる。従来、たんに武者絵と

見なされているそうした錦絵でも、月岡芳年らの筆になる慶応 4 年を中心に幕末動乱期に出版されたものは、風刺画である可能性を検討する必要性が明らかになった。

2) 異類合戦に事寄せたもの。虫合戦や鳥獣の戦いで戊辰戦争を風刺したものが複数見出され、また戦った諸藩の特産物を相争う二手に分けて描く作品など、多彩な展開が見出される。日本絵画には鎌倉時代の「十二類合戦絵巻」や、模本などで多数残る「放屁図巻き」など戯画形式での合戦図が多数制作されているが、そうした作品の伝統を引くものと考えられる。

3) 市井風俗画を装ったもの。諸商人と顧客の交流を描いた風俗画のように見える錦絵でも、画中のモチーフや図中の人物の台詞を点検すると、戊辰戦争の一面を描いたとみなされるものが多数見出される。こうした作品は、画中人物の台詞を分析することで、当時の民衆（とくに江戸の）の新政府方あるいは旧幕府方いずれに精神的に肩入れしているかが読み取れるとされてきたものである。

4) 子供あそびに仮託したもの。水遊びや雪合戦など、子供同士の遊戯に事寄せて戊辰戦争で戦う新政府側と旧幕側の諸藩を描くもの。これに関しては従来から指摘されてきているが、戊辰戦争の初期から会津戦争の末期まで多数の作例が見出され、子供遊びが風刺画のコードとして定着していたことがわかり、当時の人々は子供絵であることで風刺の意図を読み取る習慣が形成されていたと思われる。

この現象は戊辰戦争を諷した作品にとどまらず、日清・日露など明治に入ってからのもので、対外戦争を描く錦絵にまで応用されており、その裾野の広がりが注目される。

5) 鳥観図に戊辰戦争の戦場を重ねたもの。

この類型に属する錦絵は、ほぼ戊辰戦争を扱ったものに限られる。

幕末から明治初期にかけて歌川貞秀らを中心とする特定地域を大きな視野で鳥瞰する「一覽図」が流行するが、それらの中には、たんに名所景観を大観的に描き出したのではなく、戊辰戦争のある特定の戦闘の舞台となった地域を俯瞰的にとらえたものが複数見出される。

3枚続や6枚続という大画面に戦場をパノラマ的にとらえた諸作品は、たんに風刺画というよりも、戦場および戦闘の諸相を説明的に伝えるという機能も果たしていたと考えられる。二代歌川国輝の6枚続「従上総下総海浜富士遠望図」など、江戸開城以後、戦闘が下総から上総方面へと展開した経緯までも外観できる仕掛けとなっている。

6) 百鬼夜行図などの妖怪画に仮託したもの。天保 14 年(1843)、歌川国芳が描く「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」が、天保の改革を風刺したものだとの噂が立って大当たりをとった。伝統的な「土蜘蛛」の図様とは異なり、背景に描き込んだ無数の妖怪たちの姿が、改革で禁止された業種や摘発された人々の化身であり、その妖怪たちに悩まされる頼光とその部下の四天王たちの姿は、將軍徳川家慶と水野忠邦をはじめとする幕閣だと判じられたのである。

この錦絵の大ヒットを機に、以後、激動の幕末・明治初頭にかけて、風刺画が錦絵のジャンルとして急成長を遂げた。当時、直接的な政治や世相の風刺は摘発の対象とされたので、絵師たちはさまざまなカモフラージュの手法をとる必要があった。「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」の中に薄墨(モノクローム)でもって摺られた妖怪たちの姿は「百鬼夜行」と呼ばれ、四天王のモチーフとともに、風刺画であることを示唆する「コード」として攘夷の意を込めた風刺画や戊辰戦争を伝える錦絵の中に繰り返し用いられることになる。

『藤岡屋日記』嘉永 3 年(1850)の歌川国芳の「きたいな名医」が風刺画との噂がたった記事の冒頭に、「百鬼夜行の類ひならんか」とあるのは、人々の意識の中に妖怪モチーフが描かれていると風刺の意図が込められているのではないかと、という連想が出来上がっていたことを示唆している。

このことは、逆に妖怪画を描くことで人々に風刺画であるかと思わせ、当該の錦絵に対する購買意欲をおおるといふ行為も呼び起こしたものと思われ、幕末から明治初期の妖怪画の中には「百鬼夜行」と謳って、風刺画的なモチーフを忍ばせつつも、具体的にはどの事件を題材としたのか決めあぐねるものも散見される。そうしたものは深読みによって解釈を誤らないように注意を要する。

このような妖怪画の主題が風刺画に取り込まれる文化的背景としては、江戸時代前期から「百鬼夜行図絵巻」の模本製作が流行し、また江戸後期からは鳥山石燕の『画図百鬼夜行』のヒットのように、博物学的な関心での妖怪ブームが成立していたことなどが挙げられる。

以上のような6つの分類を手がかりに、風刺画作成にあたり従来の武者絵の主題や符号などを駆使して、同時代の政治的出来事を描くことを禁じる幕府の出版統制令を回避する手法が応用されていることを明らかにした。また、逆の視点で見れば、従来風刺画とは認識されていなかった錦絵でも、この6つの分類を適用させてとらえなおすことにより、あらたに風刺画として認識しうる可能性を見出しえた。

本研究の成果の一部は、平成 30 年の「錦絵 in 1868」および令和元年の「もののけの夏 江戸文化の中の幽霊・妖怪」という二つの国立歴史民俗博物館の特集展示「ものから見る近世」

の展示内容に反映させ、社会還元することができた。とくに後者はテレビ（NHK 日曜美術館・アートシーンなど）や新聞（朝日新聞千葉版、Japan Times など）などのマスコミにも取り上げられ、社会的な注目も集めた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 国立歴史民俗博物館	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 208
3. 書名 歴史研究と 総合資料学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「広重が描いた京橋界限」『目の眼』520号、2020年、50-53ページ保純一他、国立歴史民俗博物館、『もののけの夏 江戸文化の中の幽霊・妖怪』、2019年、総96ページ（74-95ページを執筆）</p> <p>大久保純一、国立歴史民俗博物館、特集展示解説シート「もののけの夏 江戸文化の中の幽霊・妖怪」2019年、4ページ</p> <p>大久保純一、歴史民俗博物館振興会、「特集展示 もののけの夏 江戸文化の中の幽霊・妖怪」『友の会ニュース』203号、1-2ページ</p> <p>大久保純一、歴博講演会「浮世絵の中の妖怪 表現と機能」国立歴史民俗博物館、2019年8月10日</p> <p>大久保純一、国立歴史民俗博物館、特集展示解説シート「錦絵 in 1868」2018年、4ページ</p> <p>大久保純一、歴史民俗博物館振興会、「特集展示 錦絵 in 1868」『友の会ニュース』196号、2018、5ページ</p>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----